

特 109  
829



始

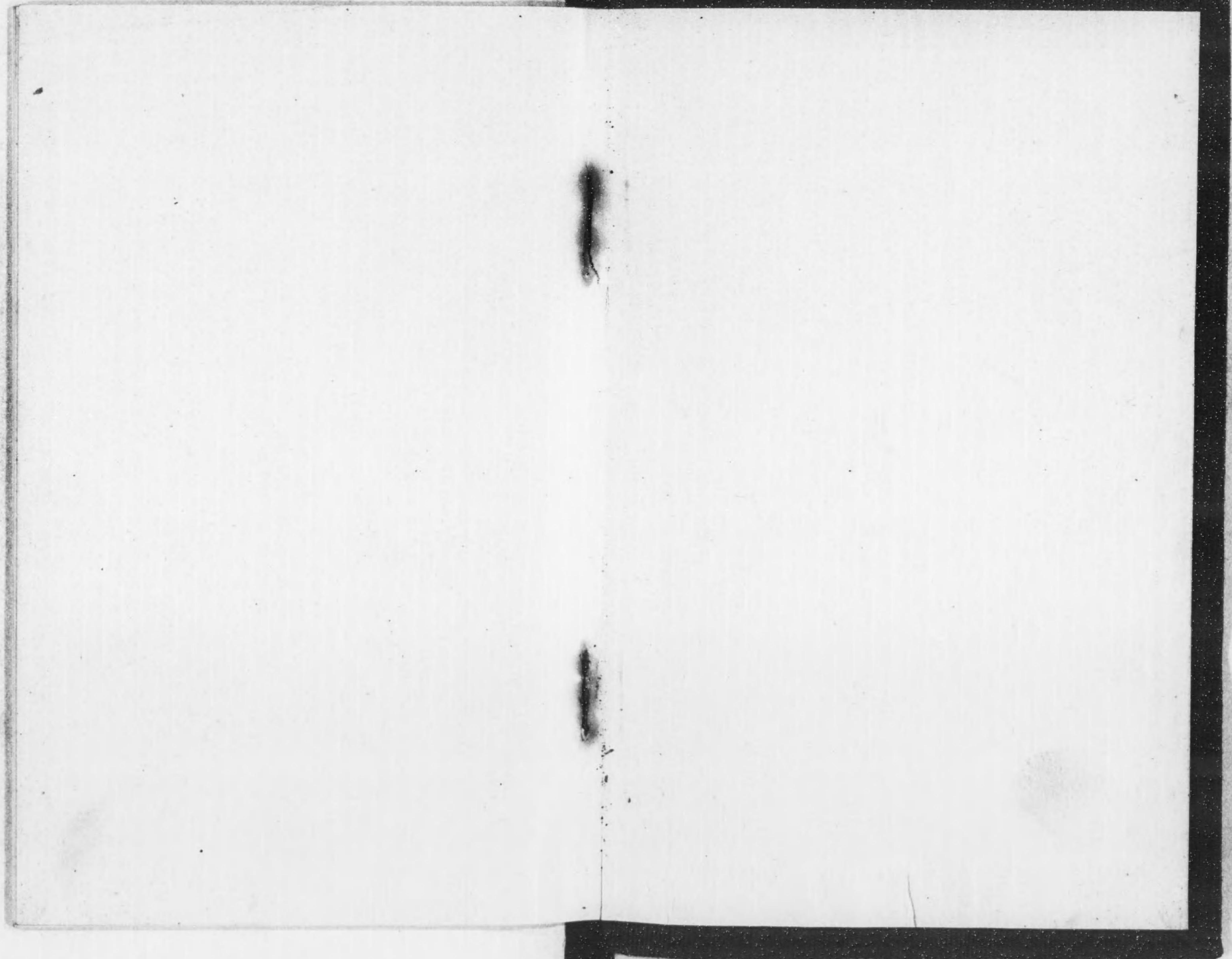


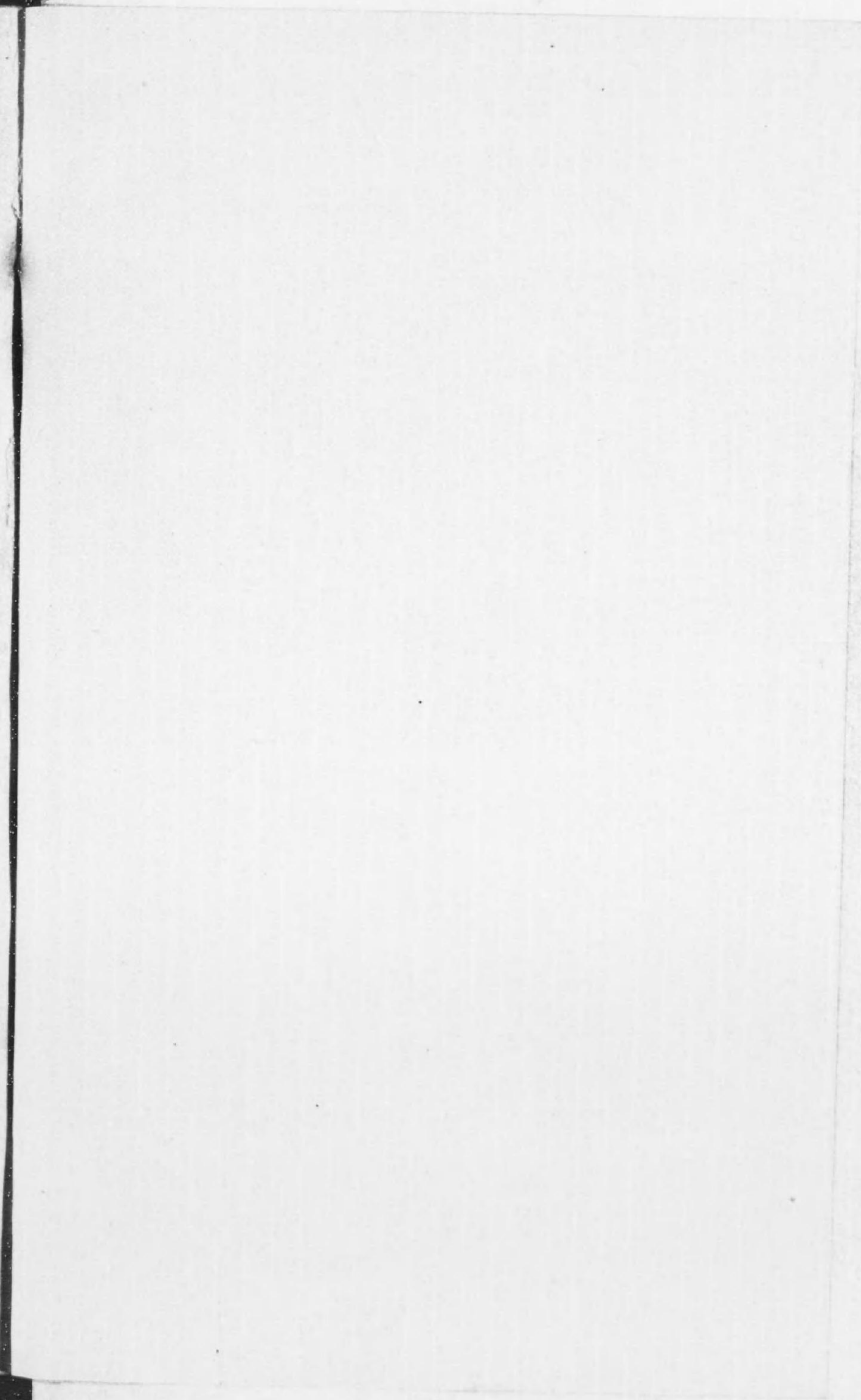
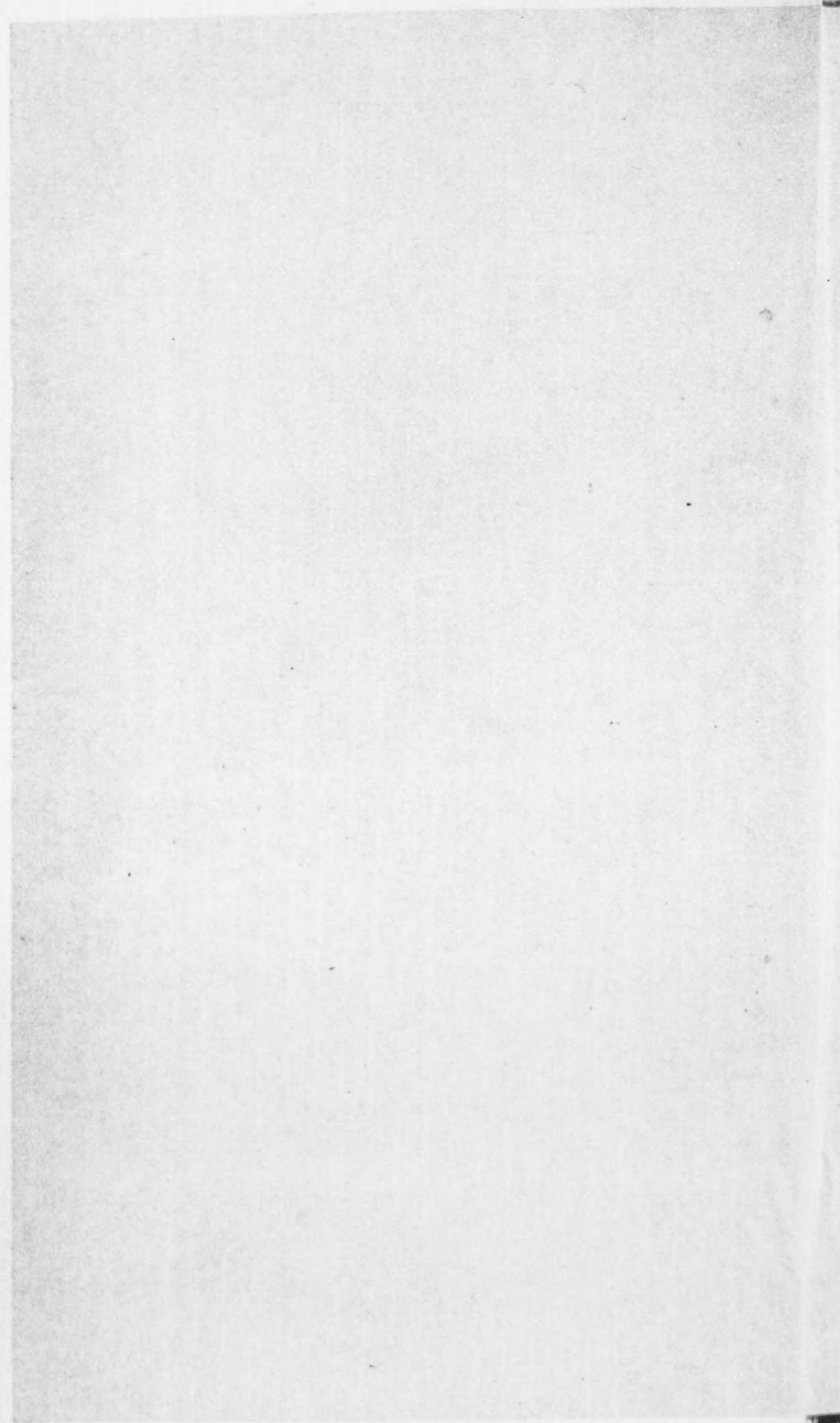
1271  
1271

ほ  
・  
づ  
ち

石  
川  
集  
子

ホ





特109  
829



ほ

ゝ

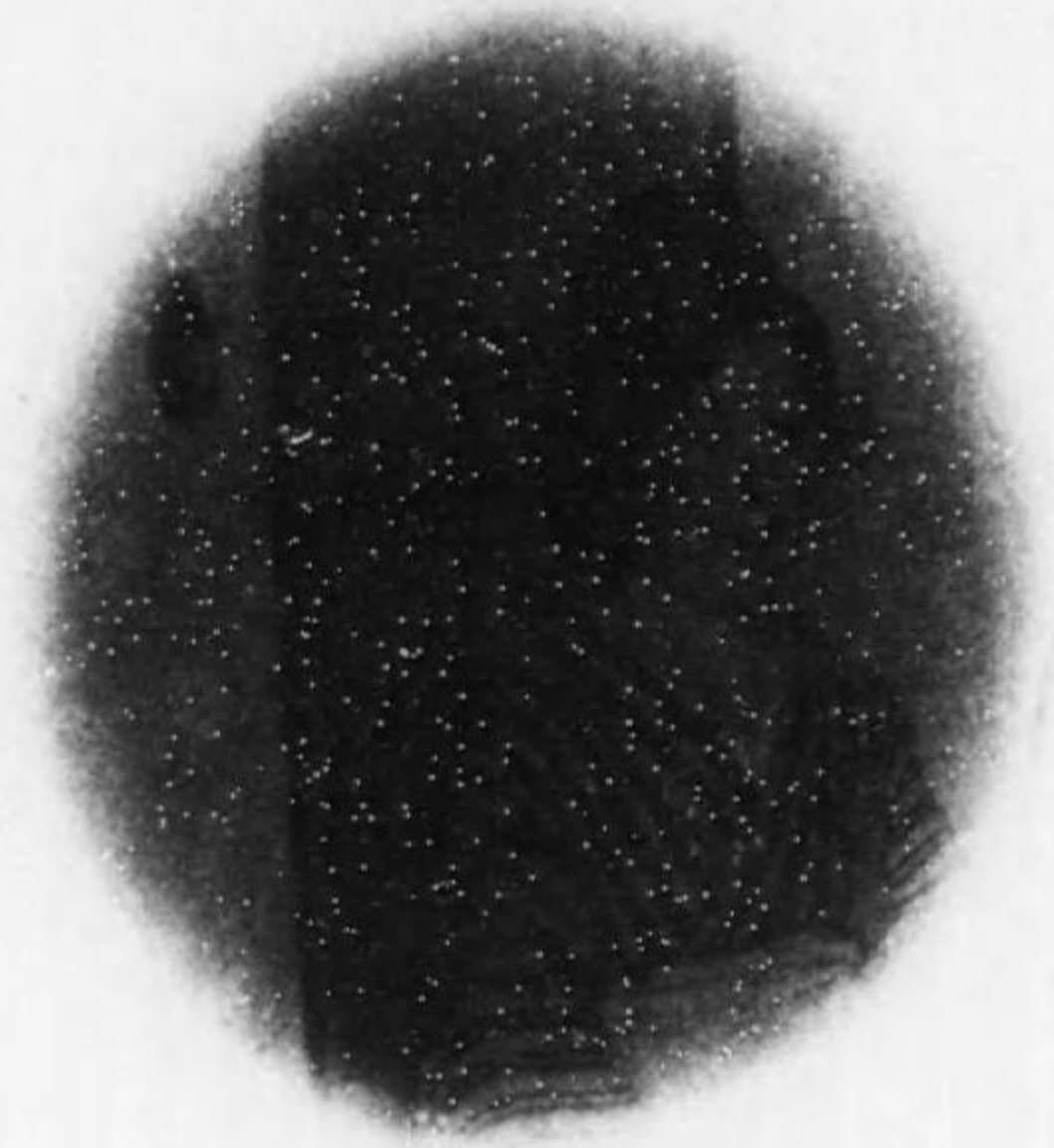
づ

き

石

川





葉がくれにはつかに結ぶほうつきの

いまだは小さし色あさくして

薰子

ゆうにやさしくすなをなること世のちりひちの外なる白百合の

姿にも思ひ比すへきは我友石川薫子の君にこそ

君は常に神の御心を信し 神に仕うなる清き操の一すしをもて萬  
つの事にあたりたまふぞかしこき

去年の秋里遠くうつりたまひてよりはさすがに朝な夕なこし方を  
のみしのはれつゝかなしくもうら淋しき月日をすくしたまひける  
が こたびつれくゝの手すすみにとて過ぎにし幾とせの間君がみ

やび心に影をとめし ま玉白玉をとり集めてふみにもものしたまひ  
ぬ けにやとりくにあはれ深きは秋の野のにしきにもたくへ  
なんとそおぼゆる 文の名は ほづきとなん

うなわ子の口にもならせ乙女子の

かさしにもさせこれのほづき

安達ゆき子

序

葉がくれにやうく結べるほづきのごとわれ末だ色あさきに  
こたびをこがましき事ながらおさなき頃より敷島の道をたどりて  
ものせしもの且つは折にふれ思ひ出つるまゝを手帖などにかきつ  
らねしものなど千首ばかりとなりければ年ふりてかなたこなたに  
散りうせんも口惜しかるべしとて親しき人のすゝむるまゝにまと  
めあわせて一つゞりとなしぬ

浅き力の世に公にせんもいと面ほでる心地せられつ



さはあれ珊瑚珠のにもゆるあまたほゞづきの中にかくれてあは  
れにもはつかに結べるが色づく時もありぬべきか

いと覺束なげながらかくはものしつ

なほわれ をさなきより慈しみふかき姉君と慕ひまつりし遞相夫  
人 安達雪子の君のわざ／＼御ふみ賜りし事こそげにうれし

葉月 なかば

著者

## 第一部

こしかたをたごりて我はねむらぬを夜やふけぬらむ水鶏なくなり

◇  
くれ竹のなかばおほへる窓の内に美しき人猫だきてをり

◇  
村雨にぬれて色ます若楓みるも涼しき夏山の色

◇  
西東せはしくかける黒雲にのりてはたたくはたゝかみかな

◇ 山川の水ぞこきよみ岩かげに小鮎ならびて瀬をのぼりゆく

◇ 角出せとよぶ聲ききてかたつぶりいよく深く身をかくすらむ

◇ わが植し心を知りて山窓に涼しさおくるばせを葉の風

◇ 見る目にもふさはしきかな菊畑つちかふ翁ひげ白くして

◇ 松風の音きながら窓のうちに心しづかに煮る木の芽かな

◇ 日かげさす向ひの森にとりなきて冬あたけき昨日今日かな

◇ 小うさぎは人になづきてたまくに籠をあくれご隠れざりけり

◇ 冬のよの夜すがらさわぐ浦千鳥波の上にも霜やおくらむ

くめばまづ心すむなり石きよく苔みごりなる山の井の水

◇

春さめのふる日に見れば道のべの柳はまだき打けぶる也

◇

はてもなき海原見ればわが心ひろくなりゆく心地こそすれ

◇

大ぶねの又もみなとにいりぬらしおろすいかりの音さわがしき

かせふけば花とちりけり山松の梢につもるけさの白雪

◇

一日をば莖つみつゝ暮しける野邊の別れのいとをしきかな

◇

朝戸出のながめうれしくきのふけふ池のみぎはにかきつばた咲く

◇

谷川の早瀬にかかる丸木橋いのちをかけて渡りける哉

◇  
こぞ見てしこの山里のかげもなし瓦家とほく軒をならべて

◇  
さよふけて里の小道を歸りくれば八幡の森に鳴く時鳥

◇  
波高き濱邊にたちて歸りくるせこの舟まつうら若き妻

◇  
しら露の玉をつらぬくさゝがにの糸もすゞしき夏の朝哉

◇  
こき色に露もにほひていとどなほはかなく見ゆる朝顔の花

◇  
いさましく竹刀とるなるわか人のかひなの力たのもしき哉

◇  
秋のきて涼しかるべきころなれどいとどあつさのたへ難きかな

◇  
人のため草ぐつとりしたなぞこに天の下をもにぎりけるかな

◇ はるかなるみ空の星の光をもうつすは池の心也けり

◇ 時雨ふりさびしきゆふべ音たてゝ柿の實一つ庭におちけり

◇ たかさをもはてをも知らぬ大空を只つくぐとあふぎみる哉

◇ 吹くおとも身にしむよはの山おろしに鹿のねたぐふ宿の淋しさ

◇ 底ふかく谷にのぞめる岩が根に一むら白く寒菊の咲く

◇ ならべたる衣やをびやの美しさとつぐ日近きわが姪の家

◇ 若水を硯の海にくみ入れてまづこゝろみる筆の跡かな

◇ 物事につゝしみ深く優しきは大和少女のほこりなりけり

◇  
みだしては又くしげづる春風にまかせて立てる青柳の糸

◇  
よる波に消えてあとなき砂の上の文字を心に浮べてぞ見る

◇  
おもしろや葉山の里の春景色すもゝ咲く庭あみ干せる家

◇  
ふさはねば捨てんとを思ふ心にもなほなつかしき紅の色

◇  
さ夜ふかみ田中の澤にすだきつゝかしましき迄蛙鳴く也

◇  
鳥のごと空をかけりて仇みかた乱れ戦ふ世となりにけり

◇  
朝戸出の露にぬれつゝふたあゐの色も涼しき紫陽の花

◇  
大岩に碎けては散る波の音を聞きつゝ一日釣暮しけり

◇  
風さむき濱邊に立ちて逃れこし都の暑さ思ひやる哉

◇  
世にすねて人の真心うけいれぬ病人いやすくすりしもがな

◇  
よしあしのしなは知らねごと國々の書あつめたる今日の虫干

◇  
わけ入りて年月ふれど敷島の道の行手のなほ遠き我

◇  
うらちかく秋の夕霧立ちこめてほのかに見ゆる磯の松原

◇  
一むらの雲だに見えぬ大空に二つたぐひて鳶のまふ見ゆ

◇  
わけくれば袖さへぬれぬふくるまで月にうかるる野路の露原

◇  
しき島の道をひらきて後の世の人のしるべとなれる君哉



◇

むれて立つ鴨の羽音にさそはれて入江の水に蘆の花咲く

◇

たか殿に灯火みえて打ならず鼓の音の高く聞ゆる

◇

風さむき雪げの空をせはしげにおくれて渡る雁の一つら

◇

み佛に仕ふるさちはありと云へごわかき尼僧の容悲しも

◇

ふる雪にしばしかくれて南天の春の光をしたにまつらむ

◇

わかき人のおのが業にはいそしまで富を夢みるうたて世の中

◇

よきははえみにくき物はかくれつゝあな面白の雪の朝けや

◇

あふぎ見れば石のきざはしいと高く静まり居ます神の御社

◇  
日にそへて消え行く野邊の白雪のひまよりもゆる春の若草

◇  
百千度波にもまれし磯ざきの貝のさまぐ形おかしき

◇  
空たかくあがりてなげご親ひばり芝生の床やなほ守るらむ

◇  
片帆まきろの音靜かに港江に船ぞ入り來る灯ともしの頃

◇  
かず知らずふみの林に咲花をみな千世までも香れとぞ思ふ

◇  
ことしおひの色さやかなる若竹にうひくしくも宿る露哉

◇  
あたらしくひらきし山の通ひ路にわきで流るゝ岩清水哉

◇  
いかだくむ柚山人の聲たえて細溪川に螢飛ぶなり

をちこちに物とがめしてなく犬の聲すむ斗り夜は更けにけり

夏之夜を葉山の海に棹さして水の上なる月を見る哉

老ぬ薬あらばとぞおもふ年々におとろへまさる心細さに

待つ友はかげだに見せず暮初めてみぎりの萩に夕露ぞ置く

いこひたる茶見世のおくにかげ見えて若きをみな糸車ひく

あはせ衣洗いていまだ縫はぬ間に夜さむ覺ゆる窓の秋風

たゝかひによしやぶるとも大君をなほ守るらむ君がみ魂は

うすくこくまだらに染めし秋山の紅葉にそゝぐ村時雨かな

◇  
かきしるしとゞむる紙のなかりせば世に古事は残らざらまし

◇  
袖がさにしのぐほごなくうち日さしたちまちはるゝむら時雨かな

◇  
朝ぼらけほのく見ゆる山河に筏おろすと人のさわげる

◇  
みしあきの庭の尾花は霜がれてひとむら咲ける水仙の花

◇  
手をつらね抱きても尙あまりある社の杉は幾世経ぬらむ

◇  
あかつきのねざめの窓のしづけさにわが心さへすみまさりけり

◇  
手になれし弓は袋におさめつゝ書にしたしむ翁たふとし

◇  
春の野に袖ふりはへて里の子も都少女も若菜をぞつむ

◇  
筆あれば寫してましを今すぐる沖の小島の朝あけのさま

◇  
人ありと思ひて來ればをがさきて山田に立てるかゞしなりけり

◇  
荒小田はすきかへされて土ぐれに心地よきまで春の日のてる

◇  
水廣き池のおもてを大鯉のみえみかくれみひれふりて行く

◇  
みづ枝さす林の中になゞ一木春を残しておそざくら咲く

◇  
やむ姉とわかれて歸る瀛車の窓にしきりに注ぐ五月雨のあめ

◇  
蹊あいに家は見えねど鳥の聲遙かに聞ゆ静かなる晝

◇  
千代紙の衣をたつとてをさなご子が缺こふなり雨の降る日に

◇

いにしへの繪に見る如きゆかしさを京の少女にみ出でつるかな

◇

はなちたる螢とばねば團扇にてあふぎても見る夕涼哉

◇

おのがなのねづみ色をやなげくらむ人にかはるゝ白ねすみ見て

◇

新しく秋草植えてあさあけの露のあはれを知りてけるかな

◇

にはとりはおのがなにおふ鶏頭の花のもとにて時つくるなり

◇

小車にゆられて歸るなはて道さびしさそへてしぎの羽かく

◇

ながめやる沖のくらしきに漁火の消えぬと見れば又みえそむる

◇

ふるき書つみて行なりながしの博士が家のわたましの日が

◇ おく霜にしをるゝ木の葉あはれなりとくさせよかし朝日子の影

◇ 霧たゝぬ冬のうなばらつきかげに淋しく光る波がしら哉

◇ やごりして雨聞く夜のさびしさに心よわくも家を思ひぬ

◇ 朝まだき市のもろ人さわがしく雪かき拂ふ音のきこゆる

◇ いつはりの多きよにしてたま〜に人のまことを見るぞ嬉しき

◇ 水青きみづうみにそふ野の上に若草もえて春は來にけり

◇ のごかなる朝にもあるかな梅咲ける野守が庵の鶯の聲

◇ うえ終へし水田のさなへ風吹けば少しゆれつゝ小波の立つ

◇  
この國に生れし幸よ國民は只ひとすちの君につかへて

◇  
よき人の眉ひそむるは更によししこめならはゞみにくからまし

◇  
朝ぼらけねぶれる花をさめよとかいとしめやかに春の雨ふる

◇  
天つちに只一人なるかなしこのよに出でむ日を樂しみにして

◇  
うづ高く書をば棚につみたれどひもとく間なき我ぞあやなき

◇  
月清き水田のくろにほのめきてあやしく鳴くは水雞なりてふ

◇  
須磨の浦松のすがたをそのまゝに繪に寫しても歸る旅哉

◇  
枝たるゝ岸の葉ざくらくゞりつゝ靜かにのぼる涼舟かな



◇ 秋風のおとづれそめて山畑のはじの下葉は色づきにけり

◇ さらにぬだに夕さびしき山寺のみ堂のもりに山鳩のなく

◇ ふけ行ばものすごきまで静なり八幡の杜の秋の夜の月

◇ 山寺のにぬりのはしら色あせてくちたる軒にはとぞなくなる

◇ さわがしき都をすて、一日をば釣に忘るゝ人ぞ床しき

◇ いさゝかのわたしなれども舟よわき友は聲だにえたてざり覺

◇ 並木みちとほりかゝればさら／＼と車の幌に散る木の葉哉

◇ いづこよりいづこにかゆく家鳩の六つなゝつ八つ空かけりゆく

たまなげて庭に遊べるかなし子の兄弟無きをあはれとぞ見る

◇  
家づくり急ぐたくみの槌の音のひゞくもかなし風さむき夜

◇  
我知らずあなあやふしとさけびけり欄干に寄るをさな子を見て

◇  
風さむき森の木蔭に霜ふみて椎の實拾ふ里のうなゐ子

◇  
心なの業とないひそうめが香をめぐるがあまり折りゆく我を

◇  
なき事をおのが心にゑがきつゝ煽にもゆる人あはれなり

◇  
小雨ふるをかの笹生をわけくれば聲かすかにも雉子なくなり

◇  
指をりて其日をまてばいとごしく春の日ながくおもほゆる哉

◇  
いけ水の氷の床をはなれきて日かげにねぶるをしごりのむれ

◇  
母とたのむ姉みまかりて我心闇にさまよふ心地こそすれ

◇  
夕ざれば軒を並べてたく蚊火のけむりいぶせき難波津の濱

◇  
峯の松谷の流れの音聞きて心静かに煮る木の芽かな

◇  
雨はれて空にかけたる橋のごと色あざやかに立てる虹哉

◇  
春たけて曉知らぬねむりよりさめて淋しき旅衣かな

◇  
千丈のがけより落つる瀧水はとごまる間なく流れ行く哉

◇  
ひく波に海士がすてたるちりあくた沖へくと流れゆく哉

好みます品の數々供へつゝたま祭する心たのしも

しめはへて新年いはふさとのいちに行くか少女子よき衣をきて

かず多き鶏の中にも鶴のみはめでたきものとたゝへられけり

さゝやけきうたげひらきておのがじし思ひを述ぶる夕べ樂しも

むらくとわきたつ雲の色にさへ夏と知らるゝ頃となりにけり

あれはてし此山寺にをしかるはあまた年經しからかねの塔

くもりては又てる空や定めなき秋の時雨のはじめなるらむ

よこはしり人はそしれど蟹の世はこれぞ正しきあゆみなるらむ

◇ 古やしろ木立を暗くけだものゝ巢となるばかりあれはてにけり

◇ いかにせむ螢はあまた飛びかへごとるすべ知らすまうけなくして

◇ さまぐゝのよき名のもとにかくれつゝひか事すなる人多き世や

◇ 露おもみかしらたわみて咲くふよう妙なる人のすがたとぞ見る

◇ かゝしたつ稻田の落穂つむ鳥のかげさへ淋し秋の古里

◇ はつ霜にめはえのもみぢかなしくも下枝いさゝか紅葉しにけり

◇ 浪の上は朝日ゆたかにかゞやきて惠の光みちわたりけり

◇ 雨風にやぶれてもなほたゆみなくくり返しひくさゝかにの絲

◇  
ふる年の業はをはりぬ今日よりはまた新らしき事初めせん

◇  
日の本はあやにかしこしおほ君のひかりあまねきうら安の國

◇  
石の垣めぐれる家の片かげに春もつれなく残る雪かな

◇  
柚人がゆきかひにふむしもと原ふみしだかれて道となりにけり

◇  
ふく風にとけて乱るゝ糸柳のかげにとふかふつばくらめ哉

◇  
たゝづめば花ぞ散り來る我門の並木の櫻今盛にて

◇  
すめ神のみ前にちかふ妹とせの花のすがたを見るが嬉しさ

◇  
生ひ立ちし我家の池のはなあやめ袖ふるゝだに懐しきかな

◇ 稻穂ふく風の音さへ物思ふ身に浸みわたる秋の夕ぐれ

◇ あきつとぶ野川の岸の花すゝきなびくすがたぞ水にうつれる

◇ たえず落つる水のしづくに岩根みな苔みごりなり山あひのみち

◇ せきいるゝ野川の水にかせ立ちて夜床すゞしきなりごころかな

◇ 日をふれば淋しかりけり三日四日は夢とすごしゝ旅の心も

◇ かへり来る親をみとめて小犬らは尾をふりながら走りゆく見ゆ

◇ 落葉たく煙はひくゝたなびきて秋の夕べのあはれ深しも

◇ たびぐゝの出水のあと加里川の岸の大木の根もあらはなる

◇ 岡の上にむれて遊びし童らの一人づつさる夕まぐれかな

◇ やね瓦しとごにぬれて見ゆれども降るとしもなき春雨のそら

◇ 人の世のうさもなげきも時の間に忘れてぞ立つ花の下蔭

◇ かもめ居る磯邊の小松みえそめて浪静かなるあけがたの空

◇ しかすがに女にしあれば針もちて衣縫ふまねす宿のうなゐは

◇ あくがれし花の盛も夢なれや青葉しげりて春暮れんとす

◇ まれに逢ふ友と向ひてしみぐと談る夕ぞ楽しかりけり

◇ 森戸崎岩根に生ふる一つ松枝なびきけり風のつよさに



垣根より長くのびたるつる草のかそけき風に打ゆらぐかな

◇  
雨はれていよく白し庭かげに今を盛と咲ける卯の花

◇  
見はるかす木々は錦と見ゆれども衣手寒し秋の山風

◇  
時雨ふるこかの渡の夕暮に船よぶ人のこゑのさびしさ

◇  
をち方につゝの音してはし鷹のあはたゞしげににげ行が見ゆ

◇  
すゝぎしてかけたる衣のしづくさへやがてこほるよ霜深き朝

◇  
物初め事をさめにも暦見し姉あらざれば心淋しき

◇  
此日頃聲はがらかに鶯の訪ひきて鳴けばあさいせられず

◇ 老人もわかきも出て木の芽つむこの山里ののどかなる哉

◇ 朝毎に日の出を拜む老人のそのならはしをよしと見る哉

◇ すぐぐくと日々に生ひたつ若竹の葉ずる涼しき月の影かな

◇ いさゝかの風だにたゞで鳴く蟬のこゑさかりなりうぶすなの杜

◇ このあたりわたうつ音の聞え來て我古里の懐しきかな

◇ 朝毎にながむる空の雲にさへさびしさ見えて秋は來にけり

◇ 白くほそきあしの白根をよき人の指に似たりと思ひてぞ見る

◇ 牛ひきて童の歸る草の庵をほのかにもるゝ灯火のかけ

◇  
むらさめの只一時のうるほひににほひこぼるゝ秋草の花

◇  
のぼり行く秋の山路の松ばやしはや茸の香の流れ来るかな

◇  
中空にそびえてたてる黒松の幹をつゝめる溪の白雲

◇  
神のます駒ヶ林の夕月夜さすがにこゝは静けかりけり

◇  
山のはは夕日の照りて草しろき向ヶ丘は時雨ふるなり

◇  
朝な夕な眺めし海の思ひ出も遠き昔となりにけるかな

◇  
日々に向ふ鏡なれども老らくを知りてし日よりうとましくして

◇  
里遠く家居定めてなに事も新まるべき年を迎えつ

山を負ふ里の軒端の梅が枝はまづ南よりさき初めにけり

さかしてなごか恐れむ世の坂路力車をわれ引きて見む

すみ捨てし澁谷の里の梅の花今宵の月やいかにさすらむ

山寺のかけ樋の清水岩つぼにあふれて又も流れゆく哉

あすこそはけふの怠かへさんとまた怠りてくらす今日哉

庭せまみしけりかねたる楓にもみづ枝さすこそかなしかりけり

小牛らの物をほりして牛かひをみつむるまなこ憐れなる哉

波間よりたえく歌ふ聲するは霧にまぎれぬ海士の友舟

◇ 我庵の軒ばのあせの花すゝきまねけご秋はとまらざりけり

◇ 小笹原そよげばゆらぐ露の玉研くもあやな稻妻のかげ

◇ 身はぬれて心ははやる生駒山時雨の雲にのりてこゆれば

◇ 朝まだき沖に音をなくむら千鳥波にいをねぬ聲がさむけき

◇ 三ツの朝指をりそめていつしかと待つ日は來り友をこそ訪ふ

◇ 駿河なるこぬみの濱も春はきて緑薄くもかすむ松かげ

◇ 春雨の降る日も萌えて道のべの行手の柳打けぶる哉

◇ つばくらめ去年の古巢の戀しとや軒ばたづねて歸りきぬらむ

◇

吉野山ふみわけて見む初み雪花の枝折はよし埋むとも

◇

けふあすと高根の花をまちをればねても枕の山めぐりしつ

◇

此年も老いて暮るれば都人わかやぐ春を松も軒毎

◇

遠近の里の童がわれさきと老さきふかき初若菜つむ

◇

ませ垣に今をさかりの卯の花は隈なき月のかげとのみ見ゆ

◇

雨はれて急ぐ少女は露衣ほしもあえずて早苗採るなり

◇

玉くしげ曉ふかく東の空かすかにも水雞鳴くなり

◇

ねの日さす小松が原に行きて見ん千代の香こめし茸も生ふらむ

◇  
岩間もるたきの白糸結ふ手に涼しくやどる夏の夜の月

◇  
山寺の入相のかねの身にしむは今日行秋を送ればなるらむ

◇  
ふすまさへ手房はなさぬ扇こそ閨の中にもむつぶごちなれ

◇  
いつの間に秋立ちぬらむ昨日今日草の袂も露にそぼちぬ

◇  
中垣の隔ても置かぬ朝顔は學びの窓にむつびてぞさく

◇  
立田川昨日の秋の名残てる紅葉の筏さすや月かげ

◇  
いざ君に祝取てもさゞげばや千尋の底の千々の白玉

◇  
古里に言傳やらむ飛田鶴に千代の初年こゝも立ちぬと

◇  
安らけき御代は研かぬ玉劍さやてふ絹に巻きておさめむ

◇  
風かほる比良の港による鳴の氷る夜床やわびて鳴らむ

◇  
すみそめて一人やめづる紅葉ばの籠めぐりの袖にこそちれ

◇  
いざ子供里の小川にの芹つまん長き春日はよし流すとも

◇  
咲きみてる花に心の奪はれてあかぬ思ひも散りぬ今日かも

◇  
やよあしび又來ん日迄移ろふな夕紅に心残れば

◇  
消え残る雪かとも見ゆ住吉の岸間はたれに咲ける卯の花

◇  
少女子の花の眠の小蝶迄驚かすらむ萩の上風



◇  
玉くしげ明行く空にまちわびし恨もはらす時鳥かな

◇  
贈るべき時も四ひらの花一枝君にさゝげん庭の紫陽花

◇  
遺水に放てば影も友と見てさりも得やらずとぶ螢哉

◇  
清水せく山邊の宿を尋來ん夏の外にも秋をこそまで

◇  
秋來れば千草八千草花咲けぞ稻の花こそめでたかりけれ

◇  
尊きもいやしき人も今宵てる月の光に心すますか

◇  
かたりあふ友のすがたは見えねども正しき聲は猶近くして

◇  
自から千代ぞ榮る門毎に松の調べも添はるにひ年

◇ 門田守る軒端續の笹原に暫しはだれの今朝の初雪

◇ 山邊にも野邊にも冬は満ぬらし湧きて流るゝ水の氷りて

◇ 一むらの紅葉の錦残れるは昨日の秋のすぎし跡かも

◇ かごかなる砌も今はときめきて春にはもれぬ草の色哉

◇ 若菜つむ廣野の芝生しばぐも長閑き聲にきゞす鳴なり

◇ 薪こる一日のうさも忘るらむ花の下道歸る柴人

◇ 荒れはてゝ庭の跡さへ哀れにも昔の色に咲くやなでしこ

◇ 小山田の庵の垣根の葛の葉もうら珍らしき秋は來にけり

◇ 朝夕に養ひつれば心迄桑この繭に籠るべき哉

◇ 行水に春は流れて藤波の影も涼しき夏は來にけり

◇ 月を厭ひ闇をぞ頼む鶉飼人おのが篝火を有明にして

◇ 夏山の麓の林わけ來れば色も涼しくさゆり花咲く

◇ 濁りたる酒にも世をば澄すべくうさ晴しつゝ事たらしつゝ

◇ 雨晴れて空は緑に位山あけをぞ装ふ紅葉ばの色

◇ 花と見しは松にからまるつた蔓もゆるばかりに紅葉してけり

◇ 日ならずにわかるゝ里と思ひ見ればすべてさびしく心ひかるゝ

◇  
辿りつゝ心細さの苔路にも立ちてまよわす女郎花哉

◇  
窓近く植えし若竹いつしかと我にもまして生立ちにけり

◇  
幾度か根をうつされし庭ざくろ葉かげに小さく花さくあはれ

◇  
賤の男が心なぐさの煙にも身をくゆらしき様ぞ見えける

◇  
山をめぐり岩根をこえて溪川を流るゝ水の清くもあるかな

◇  
細くとも清くけ高くとこしへに流れつゞけむ溪川の水

◇  
瑞枝さす若菜の下ゆたちよれば風は吹かねど露ぞこぼるゝ

◇  
海神の怒るがごとく真黒なる浪さかまきて海はあるゝも

◇ 秋寒し裏のみ寺にけふも又とぶらひあるか鐘の聲きこゆ

◇ 月を見る心のはてのあやしきは胸にくもりのあればなるらむ

◇ 色あせて庭にちりしく花こそはくれゆく春の名残なりけり

◇ ほろき柄の扇まさぐりさにづらふ都少女のすがた愛しも

◇ 葉がくれに一花咲ける朝がほは世のはかなさも思はするかな

◇ 桐の葉の散るおと聞けば悲しかるかぎりある身の世とし思へば

◇ 露にふす萩の花妻こひくゝて月にうそふくさをしかの聲

◇ 小夜ふけてかたふきかくる月かげにつまこふ鹿の聲の淋しさ

◇ 天地のひさしきまでと大君の祝ひまつらすけふの新嘗祭

◇ 下くさのたもとも淋し衣手のもりの木枯すさむこのごろ

◇ つくば山みねのしげ木も春くればかすむみごりに見えわかぬ哉

◇ ま柴山もゆともなしにこがるゝは時雨のあとの紅葉なりけり

◇ 鶯も知らじな庭の梅の花春のとなりにつけさ匂ふとは

◇ くる年のもうけだにせぬ宿にしも南の窓の梅は咲きけり

◇ 田上の川風さえててる月にひをのよるく網代もるかな

◇ きなれてし花ずり衣けふといへばうすき単衣にかふるうらなさ

君か代は巖に根ざす松にこそかけてひさしきほともいはゝめ

さす月のくまとはなれど老まつのふりせぬ枝はなごかきるべき

くれぬとて家路を思ふ友をだにあるじにましてとむる梅が香

コスモスの小枝たわゝに繁れるも花はいまだし蕾にてあり

春風に氷くだけつすみた川岸の青柳あらふ小波

ほのぐゝとかすむと見れば梅の香のけふる軒よりたち初めにけり

あら玉の年たちかへるうれしさをふくみかねてや梅香ふなる

すむ月を見るたび毎に思ふかなもし母としのまさきからばと

◇  
かれ落ちて葉かげあらはになり  
にける葡萄の棚に秋の風吹く

◇  
今年生の背戸のむら竹むらくと夕の風  
に打なびくなり

◇  
すくくとむら立竹のそよぎよりする  
ごき月の光もれくる

◇  
姫藤は三日四日のさかりにてもろくも風  
にちりそめにけり

## 第二部



◆  
身にあまるなやみある日になき姉のあらましかばと思ふ悲しさ

◆  
水かれて夏草茂る利根川のみどりかくれに月見草のさく

◆  
なめげにも又腹立しきは家人のあるを在らずと空言をゆふ

◆  
はるぐと禮を正してとぶらふもたかぶる人は門拂ひして

◇ さきさかる花のながめはさることながらわれはめづるよ花の吹雪を

◇ まことなき人の世をわび現世にそむかばほしき折も有りけり

◇ 歌まろが繪を見るごときたをやめを湯かへる人に逢ひにけるかも

◇ 桐しげる庵にすみてこの年は一入秋のあはれぞ知る

◇ しづもれる夜のみ空にそびえたつ桐のしげりの遙かなる哉

◇ うらがれてかえりみられぬ人の世にいとあたゝけき君がみ手かな

◇ 世の中の寶とこびとたかぶるとに築き立られし富者の家しろ

◇ 富めるものは鐵の扉に垣根してまづしき者を入るゝ道なし

◇ 生れ出でて事ぞともなくすごし來ぬかくして朽ちゆく我身なるらむ

◇ 二ツ三ツわれには若き友なれどいたくふけたり氣苦勞あればか

◇ おほひかゝる黒雲はらひ富士の根のすめるがごとき我心哉

◇ 春の夜のおぼろに匂ふ花かげにもものなづかしくすめる月かな

◇ くる車まつ間も友は語りけり偽善者多き世をなげきつゝ

◇ 美しく口に世をとくひぢりにもまことの人はえがたきものよ

◇ あとになりさきになりつゝ仔犬二つ我にまつはれてたはむれ來るも

◇ 久にして語り出でたる友の頬は紅さして愛しかりけり

◇ 家々の灯火見えて美しや夏の夕のそゞろあるきは

◇ をりたちてみ空あをげば一ときのいかりを忘れ心なごみぬ

◇ 風ふけば芋の廣葉におく露のコロ／＼コロとまろびけるかな

◇ かりそめの病にふして七かあまりみたまは遠く逝きて歸らず

◇ 年月によみこし歌は多けれどすぐれてよきは一つだになし

◇ まことなき人の言葉もひとむきの心もちて信ずるわれよ

◇ おさなくて母をうしなひ姉の手にはぐくまれつゝ生ひ立ちしわれ

◇ 人の世のすべての望みしりぞけてわがため生を終いし姉はも

朝とくに窓をひらけば冷え／＼と若葉のかをり漂ひくるも

◇  
いつ見ても嬉しきものは昔の學びの窓の友にぞありける

◇  
はる／＼とこの遠里をたづね來せし友の心は嬉しかりけり

◇  
しづに生ふ桐の廣葉をたゞへつゝ下行く人の仰ぎ見てあり

◇  
ふると見てふりもえやらぬ曇日のつゞくもうしやこの幾日かを

◇  
このあたりもと竹藪のあとならし家のをちこち竹生ひにけり

◇  
静かにとのがれて住る土の庵もはや知る人のありわづらはしの世や

◇  
大山のいたゞき高く猛き虎の臥するがごとく聳えたつ岩

◇ 道のべのをぐらきかげに盲人のふく笛の音こそあはれなりけれ

◇ きのふまで並びあゆみし交りも今日はえ知らぬよそ人のごと

◇ 愛しくも薄桃色の花の房名もふさはしや姫藤の花

◇ ふう風はさまでつよくはあらくにもろくもちるよ姫藤の花

◇ 百合の花風にゆらげばサラ／＼と黄なる粉のちりにける哉

◇ をりたちて手折る袂にヒラ／＼と散りてこぼるゝ小米櫻哉

◇ いつしかも聲せずなりぬひねもすを此水くばになきくれし蛙

◇ 筆おきてしばしながむる窓の外を蜻蛉追ひつゝ子らは通るも

◇ 山吹の枝にかくれてあはれにもオイラン草はさきそめにけり

◇ 片言にわれいらへせば物ひさぐ外國人のほくそえめるも

◇ あはれにもいとほしきかな病める人は不治の病と知らでありけり

◇ 庭木立茂る雑木がたゞ中にざくろの花のにゝもえにけり

◇ 今日よりは秋づきぬらし朝露に袖も涼しき萩の上風

◇ 小山田の賤がたか垣たかくとかりほの穂組つみあまる哉

◇ ふしつけて我名よびつゝたづね來す少女可愛や振りの袖きて

◇ なす業をあまたさし置き童らと遊ぶ一時物思ひもなし

庭もせにさき盛りをる白粉の黒き實目にたつ秋はきにけり

◇  
いつこよりもて來しものかさまくの品をくはへて仔犬歸るも

◇  
岩か根にくだけてはとぶ波の色は散るをおしまぬ花にぞ有りけり

◇  
のぼり行く山すそ道は秋草のさくにまかせん道さへわかず

◇  
珠洲の海沖つしは會をこく船の白帆ふきまくあかつきの風

◇  
庭もせに撫子さけばくま蜂はとびつとまりつたはぶれてあり

◇  
幾度かためらひにつゝ横町の八百やの店にたてるわれかも

◇  
はつかしくせつなき思ひも東の間よ今はなれつゝ心安けれ



世の中の何をもほつせず我を知る眞の人の只一人あれば

この風の中半なりとも吹けよかしあつさにむせぶ君が小窓に

なつかしや唄聞きをればちさき日に舞ひし手振りも思ひ出られつ

筆を置きて糸の音色を聞きにつつつかれ心にわれありにける哉

里道を買物包み抱えつゝ歸る行手にほとゝぎす鳴く

やるせなき心をいただき眺めやるみ空間ちかく星の流るゝ

世をさけて只一むきに學びます君を思へばかなしきかもよ

日毎きく向ひの家に長唄の今日は聞えず淋しかりけり

◇ 打見れば悲しさ胸にせまりきぬ語らでやまん吾一人なきて

◇ けさ見れば向ひの家のもろこしはおくれながらに紅毛たらせり

◇ よき人の愛きようなきは沈丁子の花にかをりのなきに等しも

◇ 齒の痛む吾子は淋しく出で行きぬちぎりし千葉の友がりにとて

◇ 窓の外に洗濯物の干されありぬ可愛ゆき襦袢も中にまぢりて

◇ もの干の洗濯物は白々と洗ひ上られ快きかも

◇ ゆれもせはあまき滴やをちぬらむ露にうるほふ葡萄の房より

◇ さかし女とみづから思ひあらなくなご悲しかる愚者とよばれて

◇  
買物の大き包をさげにつゝくらき夜道を小いそぎにゆく

◇  
藍色の秋のみ空にきのふけふいちじるしくも見ゆる富士がね

◇  
朝毎に桐の落葉のこぼれるて秋のあはれを知るはちかしも

◇  
ふく風にたへえで見ゆる花の中に事ぞともなく立てる鶏頭花

◇  
焼かれたる春のみ山にきのふけふもゆる緑はさわらびの色

◇  
千早振神のみ垣の榊葉に千代のためしとつもる雪哉

◇  
取り出してしらぶる間さへなき身かなから琴を琴ちりにまみれて

◇  
生くるかぎりわが忘れ得ぬ物の一つ四とせの前のこの月此日

難波津や岸のをちこち人たちてみたま送りの舟を流せる

◇  
今は早や何の興をもたぬげにこの記念日さへ忘れがちなる

◇  
そよとだに木の葉ゆるがぬ日の中をあなかしがましせみのもろ聲

◇  
並木路をひた走り來る乗合自動車をよけて通せり乗合馬車は

◇  
ぼくくと蹄の音ものごやかに乗合馬車は坂路下りゆく

◇  
小旗たてゝ唄を歌ひつ飴賣のたゞく大鼓のひゞきおかしも

◇  
口々にのゝしりにつゝ里の子は飴賣かこみたはぶれてあり

◇  
向ひ家は長唄うたひかなたには大鼓をたたき賑はしの里

逢ふ人も打見る人も美しや都大路をありくをみなは

うす衣はだのにほひもなまめきて都をみな夏の装

92	90	85	83	69	頁
一	四	三	三	四	行
ほつせす	まかせん	有りけり	土の庵	生を終いし	若菜の下ゆ
……	……	……	……	……	……
ほりせす	まかせて	有りける	この庵	生を終へし	若菜の下に

誤 正

口 印刷  
口 發行

(定價金一圓)

きづゝほ

著作兼發行者 石川 薰子

府下平塚町戸越七八七

印刷所 寺内宏文堂

府下平塚町戸越六九五

發賣所 神田神保町 一誠堂書店

逢ふ人も打見る人も美しや都大路をありくをみなは

うす衣はだのにほひもなまめきて都をみな夏の装

大正十五年九月二日印刷  
大正十五年九月十日發行

(定價金一圓)

著作兼發行者 石川 薰子

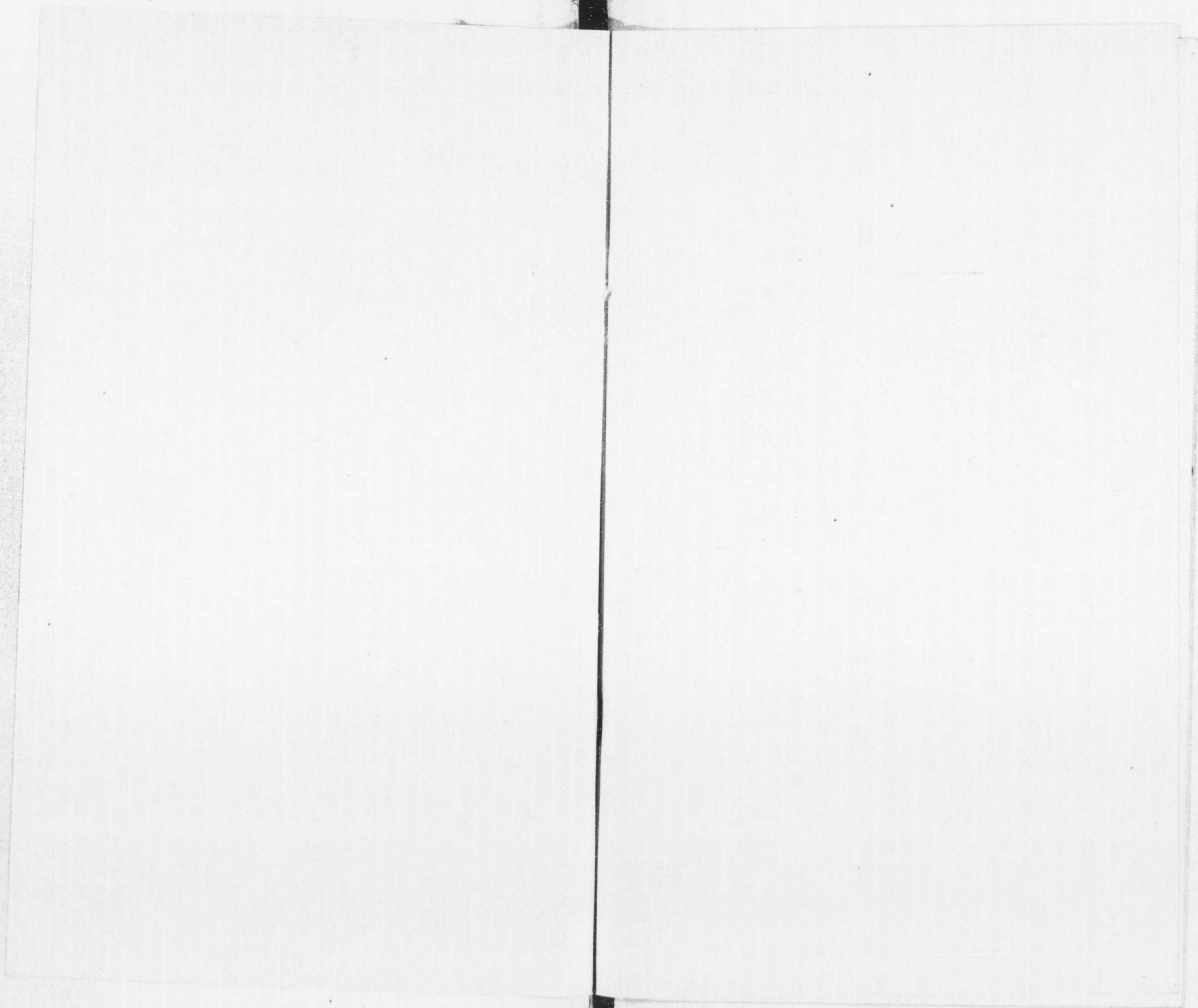
府下平塚町戸越七八七

印刷所 寺内 宏文堂

府下平塚町戸越六九五

ほづき

發賣所 神田神保町 一誠堂書店



292  
664



終

